

広報

2018

11

なか

NO.166

発行日 平成30年11月12日

発行 那珂市

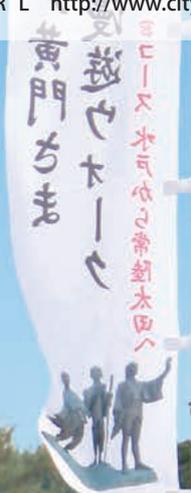
編集 秘書広聴課広報グループ

〒311-0192

茨城県那珂市福田1819-5

E-mail hisho-k@city.naka.lg.jp

U R L <http://www.city.naka.lg.jp>



目次 Contents

那珂市の財政事情	…	2
平成30年度那珂市特産品ブランド認証品が決定しました!	…	6
明治150年 那珂市域の文化人	…	8
健口管理の秘訣	…	13
まちの話題	…	22
Information	…	24



明治150年 那珂市域の文化人



今年(明治元年)から数え、150年にあたる年です。西洋の文化・文明が日本に流入し、新しい制度や生活様式が取り入れられました。当時、那珂市域でも近代化が進み、さまざまな変化が起こりました。その中の1つに鉄道の敷設による文化の交流、発展が挙げられます。

今回は、激動の「明治時代」に生きた画家・音楽家といった文化人に焦点を当て、鉄道の開通により文化の中核である東京で研鑽を積み、郷土の文化興隆に貢献した5人を作品とともに紹介していきます。

■佐川華谷・日本画家

慶応3年(1867)に本米崎村(現那珂市)に生まれました。本名は寿勝といい、幼いころから絵に関心を持っていました。

青年期に旧水戸藩士の松平雪江に師事した後、辰ノ口(現常陸大宮市)の日本画家・野沢白華の門人となりました。絵の勉強をしながら、一時茨城県警に奉職しますが、明治37年(1904)、師である野沢白華の死去をきっかけに県警を依願退職し、上京しました。南画の大家小室翠雲に師事し、さらなる研鑽を積みました。

大正9年(1920)、第2回帝国美術展覧会(帝展)に三幅対



佐川華谷『絹本墨書山水図』

の『夏山蒼翠』『寒山一路』『霜崖飛瀑』を初出品し、入選を果たしています。その作品は宮内省のお買い上げとなりました。作品は現在、宮内庁三の丸尚蔵館に収蔵されています。

華谷の帝展入選を受けて、郷土では華谷画会が組織され、展示会や頒布会を催し、那珂市域の芸術文化の興隆の一翼を担いました。

その後も、帝展や茨城美術展無鑑査出品と創作活動に励み、晩年には茨城県に『富嶽図』を寄贈し、現在は茨城県立近代美術館に収蔵されています。

昭和21年(1946)、東京にて79歳で没しました。

■武藤光蓬・日本画家

明治32年(1899)に神崎村(現那珂市)に生まれました。本名を質三といい、幼いころより絵の才覚があり、太田中学校在学中は独学で学びました。

同郷の佐川華谷へのあこがれもあり、日本画に対する思いは強く、卒業を待たずに上京し、同じ茨城県出身の日本画家・永田春水の内弟子となりました。

大正8年(1919)、20歳で兵役により近衛歩兵隊へ入隊し、除隊後は、同郷の先輩画人である佐川華谷の勧めで日本画の伝統を重んじる荒木十畝に師事しました。

大正12年(1923)、第1回茨城美術展に『皐月雨』を出展し、初入選を果たしました。

そのころ、本名の質三の名で描いた襖絵『雲龍図』が現在も鱗勝院に残されています。その力強く、迫力のある作品からは、花鳥画を得意とした光蓬の違った魅力を感じることが出来ます。



▲武藤光蓬『鱗勝院襖絵 雲龍図』

その後も茨城美術展などに積極的に作品を出品するほか、佐川華谷や、荒井緑荷らと交流し研鑽を積みましたが、これからの活躍が期待されていた昭和16年(1941)、東京にて43歳の若さで没しました。

■寺門幸蔵・洋画家

明治28年(1895)に静村(現那珂市)に生まれました。瓜連高等小学校卒業後に静神社神官に漢籍を習い、そのころは墨絵を得意としていたといえます。

しかし、後に上京すると日本画ではなく、洋画専攻者研究機関である橘橋洋画研究所に入り、黒田清輝より指導を受けました。

大正9年(1920)、召集によりシベリアへ出兵しますが、絵の才能を買われ、陸軍省囑託として地図の作成に従事しました。除隊後は東京で白面社洋画壇を組織して、三越洋画展覧会や光風会、巽画会などへ出展するなど精力的に活動しました。

しかし、大正12年(1923)、関東大震災に遭い帰水します。そこで、幸蔵同様震災により水戸に戻っていた洋画家・菊池五郎、林正三とともに新美術団体「白牙会」をその翌年に組織しました。在京経験のある彼らが感じた地方の芸術文化、特に洋画界の遅れを会の

結成をもつて興隆させようとの狙いがありました。

第1回白牙会展は、幸蔵らの尽力により中村彝ら在京している有名作家の作品も展示するなど成功をおさめ、幸蔵自身も7点の作品を出品しました。

白牙会の活動のみならず、昭和2年(1927)には、第8回帝国博覧会に『卓上静物』を出展し、初入選を果たしました。その後も連続出品、入選を果たし、静物画に佳作を残しました。昭和13年(1938)ごろには南洋群島に游学し、南洋を画題にした作品も残し、第1回茨城洋画展覧会に出品しています。

やがて太平洋戦争が始まると、画材も配給制になり、白牙会の活動は休止に追い込まれました。昭和20年(1945)春、幸蔵は思うように絵を描けぬ失意の中、終戦を待たずに51歳で没しました。



▲寺門幸蔵 『風景画(油彩)』

■細谷一郎・作曲家

明治37年(1904)に芳野村(現那珂市)に生まれました。両親は教師でしたが、一郎が幼いときに他界し親戚に育てられました。幼いころ、ハーモニカが好きで溜池のほとりで練習する姿がよく見られたといえます。

大正9年(1920)、単身上京し東京音楽学校に入学しますが、志す作曲科がなく、山田耕柞の門下生になりました。当時のことを耕柞の娘・日沙は「家族の一員のように、父に対して深い尊敬と愛情を持ってくださいました。」と細谷一郎歌曲全集に寄せています。

大正14年(1925)、日本交響楽団に入団し打楽器を担当。昭和3年(1928)にNHK専属作曲家として入局し、主にラジオ番組『子供の時間』の音楽を担当しました。その後も『たかいたかい』や『みつばちぶんぶん』といった子ども向けの童謡のみならず、歌曲や交響曲も作曲するなど、精力的に作曲活動に励みました。それらの活動の中で、作詞家である与田準一と出会い、新たな活躍の場を見出します。与田は北原白秋の元で作詞を勉強し

■鈴木章弘・民謡作家

明治34年(1901)に芳野村(現那珂市)に生まれました。芳野尋常小学校を卒業したのち太田中学校を卒業しました。

銀行、電力会社の勤務を経て、大正13年(1924)、読売新聞社に勤務。翌年には、当時住んでいた千葉県市川市のタウン紙『市川友の会』を発行します。そのことがきっかけとなり、章弘の詩作の才能が開花していきます。

昭和5年(1930)に文芸誌『枇杷の実』を刊行。昭和7年(1932)に東京都小岩に転居。昭和9年(1934)には『詩と歌謡』を出版し、全国の書店店頭に並ぶなど好評を得ました。特にこの冊子の発行に関して、詩作のみならず編集の才能も発揮し、約10年にわたりその活動を続けました。

その活躍の基には、野口雨情の存在がありました。『枇杷の実』刊行のころ、茨城県ゆかりの詩人らを集めた懇親会がきっかけとなり、詩作を野口雨情に師事するようになりました。昭和8年(1933)に民謡集『茶の花』を発行した際には、題字および序詩を野口雨情が記して

おり、章弘は、気取らず謙虚な雨情の人柄に深く感銘を受けたといえます。ちなみに、表紙と本文中の挿絵は先に紹介した日本画家・武藤光蓬が描いており、この3人の交流も大変興味深いものがあります。

戦後、郷里の芳野村に戻った章弘は、農作業の傍ら詩作を行いました。昭和30年(1955)、町村合併により那珂町が誕生すると、初代収入役に就任し、地域発展にも尽力しました。

平成4年(1992)、その生涯を終えます。郷愁に満ちた章弘の残した作品集は、郷土資料として市立図書館に收藏されています。

※12月1日(土)まで歴史民俗資料館で展示中です



▲鈴木章弘 『茶の花』
題字 野口雨情
挿絵 武藤光蓬

お知らせ

明治150年記念展示「那珂市域の文化人」を12月1日(土)まで歴史民俗資料館で開催しています。

お問い合わせ

歴史民俗資料館(那珂総合公園内)
☎297・0080